いるのです。私は、前から江戸時代の浪人よろしく楊子を作ってみたくてしょうがなかった。近く引越をするので、それに備えて切り詰められた山椒の枝が沢山落ちている。結局、原稿は進まないので、庭へ降り、肥後の守を使って削ってみたりする。形良く先端を尖らすのが難しい。私は口唇期に固着があるというのか、何か口にくわえているのが好きである。比較的形良くできた一本を噛みながら、部屋に戻って、原稿の続きを考えていたら、何やら口の中が痺れてきた。切り立ての山椒の木は楊子には使えないようだ。そういえば、初めてタバスコをレストランで見たとき、味見してみようと掌に振り出してなめてみたことがあったっけ。あれはもの凄いものであった。（東京都立大学）

○わきみのすすめ

村田修子○

「わきみをする……」ということは、「とんでもない」「いけないことにきまっている」という結論がすぐに出てしまうことでしょう。この題名についても、「すすめ」ということが殊更にくっついていることからしても、概念的には好ましくないもの、と定義づけられていることを感じます。

それが表面きって、わきみをすることをすすめる、という題を頂いて、その立場に立って考えてみますと、「とん

でもない」といわれる狭義のわきみではなく、視野を広く、ということを指す意味もあると思いますので、それらに属する経験を幾つか上げてみようと思います。

娘が幼児だったずっと以前のことですが、入園して丁度私の隣のへやになりました。最初の一ヶ月位の間は彼女は張り切って登園し、クラスに入ると親のことなどすっかり忘れたように夢中になって遊んでいましたし、時に顔を合わせても知らん顔をしていて、すっかり園児になり切っていました。それは親として娘のことに気を使わなくてもよい状態でしたから、ちょっぴり拍子抜けしたような思いをしながらも、他の子どものことに専念することができ、都合のよい日々をおくることができました。

何の抵抗もなく集団生活の中に入りましたので、そのまますらっといくこととばかり思っていた予想を裏切って、突然自分のクラスから抜け出してきて私にくっついたり、だかさろうとしたり、離そうとするとなき叫んだりするようになりました。

その状態は、まだなれない他の子どもたちに気を配らなければならない私にとって困ったことには違いなかったのですけれども、考えてみますと、入園したては何もかも新らしいことばかりが目の前にあるために夢中になれていたのが、その一つの課題をおえて、やや気分的に落着いて、自分のまわりをながめる余裕ができてきたときだったのでしょう。みると、いつもは自分の相手をしてくれたり、甘える対象である母親の回りに同じような年齢の子どもが多勢いるし、母親はそれに手をかしているのです。それはとても許せないことだったのです。

娘はいろいろ手をかえて自分の方へ注意をひきつけようとしたのです。でも朝自分のへやへ入るのは普通にできていましたから、そのあとはなるべく顔を合わせないようにしましたが、私は、困ったと思いながら反面、子ども本来の姿を見出してほっとしたのも事実です。

これは間もなく友だちができて、その遊びが楽しくなり、それに娘自身の成長も伴って、全然意識しないで過せるようになりました。

娘はそのごねた時点で、わきみができるようになったのです。これはすばらしい進歩です。わきみをすることは経験し、学んでいるときなのだ、といえると思うのです。

それをひしひしと感じるのは、その次の世代の一歳と二歳の子と一緒に散歩をしたり買物にいくときの二人の「わ

きみ」なのです。

蟻の巣のあるところは覚えていて必ず立ち寄って蟻の動きに声をあげたり、指さしたり、時にはふみつけてしまったり、しゃがみ込んで暫らくは離れないのです。それは行きにも帰りにもきまってその場所にくればやれるのです。そして本を開いたときに蟻が書かれていようものなら、「ありしゃん」とか「ちいち」と屋外を指さして自分の知っている蟻の存在を思い出す様子をするのです。

このわきみはすばらしいことだと思いますが、本音、このおつきあいには忍耐が必要なことはたしかですから、さまざまな現在の環境の中で生活している現在の母親たちの問題として、「わきみ」を十分にさせないことがあげられるのではないでしょうか。

大人でも、廊下で会ったとき普通に挨拶するときと、会ったことに気がつかない様子のときのある人がいます。心が平穏なときと、何かに心を奪われているときとでは全然態度が違うのです。夢中になれることはすばらしいことに違いないにしても、一般社会に生活するための基本的・常識的なことまで実行できないほど、わきみをせずにつき進んでいく余裕のなさは、私にはどうしても不可思議なこととしか思えません。

●始めて顔を合わせたのに挨拶もせず、自分の用件だけを言って帰って行く母親

●教師の状態を判断することなく、自分のことばかり言う母親

自分も子どもを持っている母親とは思えない無神経とも思える様々な経験をして、こういうように育ってしまった人たちをどうしたらいいのだろう、このへんを何とかしなければ子どもへの影響も大きいのだけれど、と愚痴ったり、悩んだり、腹をたてたりすることの多い昨今なのです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）